

「真実の宗教」 (十六)

——私にとって報恩とは——

櫟 暁 講 述

〈資料一〉

浄土真宗（浄土真宗の意味）

〈浄土真宗〉という語は宗名でなく、真宗聖典では、次のような本質的な意味で用いられている。

（一）真実の教え。阿弥陀仏の本願を説く無量寿経の教えのこと。（標列・教巻・化巻）

●標列（一五〇―一五二）

大無量寿経 真実の教 浄土真宗

●教巻（一五二―一五三）

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

●化巻〈本〉（三四五―一五五）

四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰穩密の義ありといえども、信心を彰わして能入とす。
（以上真実教）

◆私解 真実教は方便教（主として聖道門及び〈その他の哲学思想〉を含む）に対し、また

一般世俗の邪偽（名利愛欲追求・現世祈祷）に対す。

(二) 選択本願すなわち第十八願（末灯鈔・高僧和讃）

● 末灯鈔（六〇一—L九）

浄土宗のなかに真あり仮（ケ）あり、真というは選択本願なり、仮というは定散二善なり、
選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

● 高僧和讃（四九八—B二）

智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう
（以上浄土真宗の根源）

◆ 私解 選択本願は諸仏・諸菩薩の本願に対す。

(三) 念仏往生（一念多念文意）

● 一念多念文意（五四五—L十六）

浄土真宗のならひには念仏往生ともうすなり（浄土真宗の伝承）

◆ 私解 念仏往生は諸行往生（『観経』顕説）に対す。

(四) 信心往生の教え (唯信鈔文意)

● 唯信鈔文意 (五五二—L七)

眞実信心をうれば実報土にうまるとおしえたまえるを、浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。
(浄土眞宗の本質)

◆ 私解 信心往生は単なる死後往生思想に対す。

(五) 他力

● 親鸞聖人血脈文集 (五九四—L三)

それ、浄土眞宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。(中略) (L六) 他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力と申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。(他力の救済)

◆ 私解 他力は自力分別によつて人生の根本問題を解決しようとする努力に対す。

(六) 浄土成仏

● 歎異抄 (六三七—L一)

「浄土真宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならひそうろうぞ」とこそ、故聖人のおおせにはそうらしいか。（他力の救済の因果）

◆私解 浄土成仏は人間の分別世界において悟りを開こうとする思想・言動に対す。

これらは、浄土門の真実の教え、浄土真宗の救済の原理、浄土真宗の根源、浄土真宗の伝承、浄土真宗の本質、他力救済の因果を示しているのであつて、宗祖親鸞においては〈浄土真宗〉（真宗または浄土宗）とは特定の宗派名ではなくて、阿弥陀仏の浄土に往生・成仏する道そのもの、その教えの本質的意味をあらわしている。そして宗祖親鸞は師の元祖法然に絶対随順していたから、宗祖親鸞の言う〈浄土真宗〉とは、元祖法然によつて明らかにされた浄土往生・成仏を説く真実の教えなのである。

〈資料二〉

親鸞聖人血脈文集（五九四―L一）

（一） かさまの念仏者のうたがいとわれたる事

それ、浄土真宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすでに天竺の論家・浄土の祖師のおおせられたることなり。まず、自力と申すことは、行者のおのの縁にしたがいて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいのころをもって、身・口・意のみだれごころをつくろい、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり。また、他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力と申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。義ということは、はからうことばなり。行者のはからいは自力なれば、義というなり。他力は、本願を信樂して往生必定なるゆえに、さらに義なしとなり。しかれば、わがみのわるければいかでか如来むかえたまわんとおもうべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆえに、わるきものとおもうべし。また、わがこころよければ往生すべしとおもうべからず。自力の御はからいにては真実の報

土へうまるべからざるなり。「行者のおのおの自力の信にては、懈怠・辺地の往生、胎生・疑城の浄土までぞ、往生せらるることにてあるべき」とぞ、うけたまわりたりし。第十八の本願成就のゆえに、阿弥陀如来とならせたまいて、不可思議の利益きわまりましまさぬ御かたちを、天親菩薩は尽十方無碍光如来とあらわしたまえり。このゆえに、よきあしき人をきらわず、煩惱のこころをえらばずへだてずして、往生はかならずするなりとするべしとなり。しかれば、恵心院の和尚は『往生要集』には、本願の念仏を信樂するありさまをあらわせるには、「行住座臥をえらばず、時処諸縁をきらわず」とおおせられたり。「真実の信心をえたる人は、撰取のひかりにおさめとられまいらせたり」とたしかにあらわせり。しかれば、「無明煩惱を具して安養浄土に往生すれば、かならずすなわち、無上仏果にいたる」と、釈迦如来ときたまえり。しかるに、「五濁悪世のわれら、釈迦一仏のみことを信受せんことありがたかるべし」とて、十方恒沙の諸仏、証人とならせたまう（散善義意）と、善導和尚は釈したまえり。「釈迦・弥陀・十方の諸仏、みなおなじ御ころにて、本願念仏の衆生には、かげのかたちにそえるがごとくしてはなれたまわず」とあかせり。しかれば、この信心の人を釈迦如来は、「わがしたしきともなり」（大経）と、よろこびまします。この信心の人を「真の仏弟子」といへり。この人を正念に住する人とす。この人は、撰取してすてたまわざれば、金剛心をえたる人と申すなり。この人を、「上上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とも

うす」(散善義意)なり。この人は正定聚のくらいにさだまれるなりとするべし。しかれば、「弥勒仏とひとしき人」とのたまえり。これは真実信心をえたるゆえに、かならず真実の報土に往生するなりとするべし。この信心をうることは、釈迦・弥陀・十方諸仏の御方便よりたまわりたるとするべし。しかれば、「諸仏の御おしえをそしることなし。余の善根を行ずる人をそしることなし。この念仏する人をにくみそしる人も、にくみそしることあるべからず。あわれみをなし、かなしむところをもつべし」とこそ、聖人(法然)はおおせごとありしか。あなかしこ、あなかしこ。

仏恩のふかきことは、懈慢・辺地に往生し、疑城・胎宮に往生するだにも、弥陀の御ちかいのなかに第十九・第二十の願の御あわれみにてこそ、不可思議のたのしみにあうことにて候え。仏恩のふかきことそのきわもなし。いかにいわんや、真実の報土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、仏恩よくよく御安ども候うべし。これさらに、性信坊・親鸞がはからい申すにはあらず候う。ゆめゆめ。

建長七歳乙卯 十月三日 愚禿親鸞八十三歳書之

〈法 話〉

本年も報恩講で私の法話をしばらく聞いていただくことになりました。毎年報恩講におじやまして、今年が最後だというような気持ちで法話をさせていただいているのですが、命がまだ続いておりまして今年もおじやますことになりました。どういうお話をしたらいいかなあと思っているいろいろ考えたのです。毎年、主に報恩講をお勤めする意義というようなことを中心にお話申し上げてまいりました。皆さん方のお手元にあります印刷物が毎年作られておりますので、それをごらん頂けば大体そんなことなのですが、今年はちょっと私に考えがありまして、三年後に親鸞聖人の七五〇回御遠忌が本山で勤まります。ところが二〇一一年度という年は法然上人の八〇〇回忌でもあるわけです。それはどういうことかともうしますと、親鸞聖人と法然上人のお歳が四十歳違われます。親鸞聖人が法然上人に会われてお弟子になられたのは二九歳だどご本人が記しておられます。その時に法然上人は六九歳でした。法然上人はその後流罪に遭われて、流罪が終わって京都にお帰りになって直ぐに亡くなったその年が八十歳でいらっしやいました。ところが親鸞聖人は九十歳でお亡くなりになりますので、そこで十年差があります。そういうことで御回忌が毎回五十年隔たります。今回は親鸞聖人の御遠忌が七五〇回忌、法然上人の御遠忌が八〇〇回忌、こういうことであります。そこでいろいろ考えさせられまして、今日、皆さん方に

見ていただいております資料をご覧いただきます。

浄土真宗と題しております。それは、浄土真宗という教えの名称でございまして、現在は一般に宗派の名称として理解されています。ところが親鸞聖人は浄土真宗という言葉をお使いになり、それがいろいろなところに残された書物の中にでてくるのですが、宗派をたてるというとうお気持ちには全くありません。私は法然上人の弟子である。浄土真宗を開かれたのは法然上人であると云っておられます。それで、私は浄土真宗という教えは法然上人と親鸞聖人のお二人で共同して顕かにされたのが浄土真宗という教えであるという具合に了解しております。ところが、それから七五〇年、八〇〇年も経ちますとその意義がはっきりしなくなりまして、浄土真宗というは宗派の名前だと一般的に了解されています。それは、ご承知の京都の知恩院は浄土宗の本山だと。東西本願寺、佛光寺とか興正寺とか専修寺・木辺派の錦織寺などのお寺は真宗の本山だといっているのです、いかにも浄土宗と浄土真宗が別もののように考えている。またその宗派ということになりますと、そこに世間的なものが出てきまして宗派の競争というような意識がでてまいります。そしていよいよ間違ってまいりまして、法然上人が顕かにされなかつたことを顕かにしたのが親鸞聖人だと。親鸞聖人が法然上人よりも格が上なのだというそういう宗派我が自然とでてくる。また、浄土宗のお話を聞きますと親鸞という人は法然上人の弟子であったことは間違いない

ないが、法然上人の教えを正しく伝えていないのだと。これは親鸞浄土教というものである。法然上人の開かれた浄土宗とは違うのだと浄土宗の方では云われる。そのことをもつと詳しく云えば云えるのですが、今日は時間が短いのでそれくらいにしておきます。私はそういうものの考え方や受け止め方は間違っていると思います。浄土真宗というのは教えの名称です。こういうことをこの際はつきりしておかなくてはならないと思ひまして、この資料を作りました。この資料に番号を打っております。一、二、三、四、五、六と番号を打っております、浄土真宗とはどういふ教えかということをお六項目挙げてわかりやすいように書いています。それで、一項目ずつお話し上げていきたいと思ひます。わずか一時間の間でこれ全部お話しすることはできません。残るかもしれませんが、まず最初に資料を見ていただきます。

(一) 真実の教え。阿弥陀仏の本願を説く無量寿経の教えのこと。

これは『仏説無量寿経』と云うのはご承知のとおり『大経』という上下二巻ある浄土真宗の根本聖典であります。「大無量寿経 真実の経 浄土真宗」という言葉が、『聖典』をお持ちの方は見ていただきたいと思ひますが、一五〇頁の十一行目にあります。

「大無量寿経 真実の教

浄土真宗」

『教行信証』の総序が終わりまして、その後に「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」とあります。一五〇頁左側です。それでもう一つ次に一五二頁三行目に

「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。

それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。」

と、はっきりと述べてありまして、『浄土三部経』のうちの『大無量寿経』が浄土真宗の正依の経であり、これが真実の経であるとはっきりと述べられている。それで『観無量寿経』、『阿弥陀経』はそういう意味で方便の教えであり、また、『観無量寿経』、『阿弥陀経』だけではなく、その他たくさんのお釈迦様の一代経といわれる教えは全部この『大無量寿経』、真実の経に対して方便の経であるということ親鸞聖人は顕かにしてくださったわけでありまして。そこで真実の経ということをもっと易しく申しましたら、どういうことかと云いましたら、どんな人でも男性であろうと女性であろうが、あるいはまた、善人であろうが悪人であろうがその前にもうひとつ凡夫で

あろうが聖者であろうが、凡夫とは普通の人間、普通の暮らしをしていて、大体凡夫というのは聖道門の修行が出来ない普通の欲望生活をしている。家庭生活、社会生活、共に欲望の生活を思いうようにしたいが思うようにならないと嘆き、また自分の都合の悪いことが起こると人のせいにして腹を立てるといふそういう生活を続けているもの。こういう凡夫と釈尊ならびに仏弟子が欲望生活から離れて修行する、つまり生産をしない、家庭をもたない、職業を持たない、民衆の布施によつて修行に専念するというほんの一握りの人たちを聖者と、聖者を目指している人も含めて聖者といひます。凡夫が大多数であります。聖者がほんの少数であります。法然上人、親鸞聖人が出られる前の仏教というのはこの一握りのほんの僅かな聖者のための仏教でした。また聖者になるための仏教でした。それは多くの普通の生活をしている私達のような凡夫は対象外になっていた。凡夫は多少仏教の教えを聞いて聖者の生活に憧れたり、あやかたりする事があるかもしれないが聖者にはなれない。これでは悟りは開けない。こういうのが親鸞聖人、法然上人の以前の仏教者の考え方でした。これはお釈迦様、釈尊の教えの本意にはならないのだとはつきりして下さったのが法然上人、親鸞聖人です。というのは全ての人がどんな状態で生きていても男性であろうが女性であろうが聖者であろうが凡夫であろうが善人であろうが悪人であろうがどんな人でも平等に救済されるのが真の仏教だと。こういう意味での浄土真宗です。

仏教を言うのは二つの意味があります。

仏教

釈迦仏の教え
諸仏の教え

成仏教 全ての人が仏になる道を説かれた教えである。

一つは「釈迦仏の教え」これを展開すると、もうひとつ「諸仏の教え」もう一つは「成仏経」である。それは全ての人が仏になる道を説かれた教えである。つまり迷いから完全に離れる道を歩むことができる教えなのです。こういう二つの意味があります。大わけにしますと釈迦仏の教えと成仏経、成仏教とは全ての人が仏になる道を説かれた教えである。ところが、法然上人、親鸞聖人以前の教えではこちら（すべての人の成仏する教えとしての成仏教）のほうがなかったのです。聖者だけの仏教では全ての人とはいかないわけです。そこに着眼をされて法然上人は浄土宗を立教開宗されたのです。詳しく申しますと、中国にも浄土の教えがあります。インドでもあります。インドでは龍樹菩薩、天親菩薩というような方が浄土の教えを説いておられる。中国では曇鸞大師を始め多数の人たちが浄土の教えを説いていられる。その中でもっとも素晴らしい方が曇鸞大師と善導大師である。ただ中国では浄土宗は独立していなかったのです。他の聖道門の庇ヒサシを借りて浄土の教えが存在していた。つまり寓宗グウシュウとは借家とか仮住まいということ。寓居ヒサシといえます。学生が下宿するようなものです。私も戦争前ですが京都で下宿していました。

やっぱりどれだけ無遠慮だといってもやっぱり他人様の二階を借りておりますと、やっぱり遠慮があるわけです。夜遅く大きな声を出してはいけない、あんまり遅くや、早く下の人が眼を覚まさないうちにドンドンやっついていかんというように遠慮があり、気を使って下宿しておりました。十九、二十歳ぐらいの大人になりかけた者ですから、そんなに社会人のようにはいかないかもしれないですが、それなりに気を使って暮らしているわけです。そういうことを譬えて申しますと、中国の浄土教は聖道門仏教に配慮しつつ浄土の教えが続いてきた。ところがその浄土教が日本に伝わってきた。すでに奈良時代に伝わってきたわけです。主に天台の教団の中に天台の浄土教としてあつたわけです。そこに源信僧都という方が出てこられたということはご承知のとおりですが、そういう寓宗の浄土教から日本で浄土教を独立させた方が法然上人であります。「南無阿弥陀仏往生の業は念仏を本となす」南無阿弥陀仏は言葉の用（はたら）きによって全ての人が成仏できる教えが浄土宗だと法然上人が日本で始めておっしゃったら大問題がおきて聖道門から大変な攻撃が来たわけです。そして、ついに浄土宗の教団は解散を命じられ念仏は停止を命ぜられた。そういうことはよく聞いておられるでしょう。法然上人は土佐に流されるところを九条兼実という権力者が、非常に努力して四国の太平洋側ではなく瀬戸内海側でこらえてもらえるように運動したので、讃岐の国に行っておられた。四国に流される時輿の上でずっと法然上人は念仏をしておられた。警護の武士がやめるといった。「なつてない。おまえは念仏停止の法、念仏を

止めなくてはいけない法の違反者として今流罪になっておる。今、流罪の道すがら念仏するとはなっていない」ところやかましくいったそうです。そうしたら法然上人は「私は殺されても念仏は止められません。」と。そういう方です。殺されても念仏は止められない。我々もお蔭で念仏者にさせてもらっていますが、殺されても念仏は止められませんというような念仏者になつていいのでしょうか。

殺されても念仏を止められませんというまで信心が徹底しているかという問題があります。歴史的事実として知ってはいるが、自分がそういう念仏者になっているかが大問題です。そういう命がけで念仏の教えを日本で独立させた方が法然上人です。法然上人あつての親鸞聖人です。もちろんこれは、『選択本願念仏集』という浄土宗独立の根本聖典を九条兼実の要請によつて書かれた。それが広がったことによつて大変な非難を受けられたわけがあります。親鸞聖人も法然上人と同じ罪を受けて越後に流されたことはご承知のとおりであります。親鸞聖人が四十歳の時に法然上人が八十歳でなくなります。聖人は京都に帰ろうと思われたでしょうが京都に帰つても法然上人にお会いすることはできないということとで京都に帰られることをあきらめられ、関東に行かれたであろうと思われます。はっきり親鸞聖人がそう云つておられる文献はないのですが、開拓民と一緒に越後から茨城県のほうにお移りになつたらしいということです。それから六二歳ごろまで関東で法然上人の教えをずっと一生懸命勉強され、法然上人の教えが真実の教えである

ことを明瞭にしなければならぬ。これが私に与えられた使命感だということをはっきりされて『教行信証』という我々の最も尊重する根本聖典をおつくりになった。それで『教行信証』の一番先に今申しますような「大無量寿経 真実の教浄土真宗」というお言葉があるわけです。この資料をみていただきます。

『化身土巻』の本巻（三四五頁十五行目）には、

「四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰隠密の義ありといえども、信心を彰して能入とす。」

四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。「濁世の邪偽」というのがわかりにくいです。仏教の専門語で。「濁世の邪偽」と云うことは不純粹な混濁した世の中、五濁とは劫濁、衆生濁、煩惱濁、見濁、命濁ということでした。時代そのものが濁っている。人間の命そのものが濁っている。人間の考え方そのものが不純粹である。それは煩惱によつて生活しているからである。そういつて全ての人が濁れる生活をしていることが衆生濁である。こういう具合にお経の中では説かれております。それを一言で云いますと濁世ということでした。「濁世の有情をあわれみて」という言葉が『和讃』（正像末和讃五〇三頁中段32）中に出てきます。

濁世の有情はどういうことかと云いますと、自分の幸福を追求するために利用すべきものは全て利用しようというような考え方で利己的な生活をしており人間がつくっている世の中ということです。ちよつと言葉が長くなりました。そんな考えで現世祈祷をする人が多くなっている世の中です。

いつも譬えを出すのですが、天神さんという神社があります。天神さんというのは真宗の天親菩薩とは違います。菅原道真を祭神にしておる天神、京都に北野天神があります。天神さんがなぜ出来たかといいますがそれは京都から大宰府に左遷された憤りが菅原道真にあり、その祟りが恐ろしいということで神社を造って菅原道真の霊を祭らなければならぬという気持ちで出来た神社が天神です。ところが時代が変わってそれが学問の神様になり、学問の神様がまただんだん変わって入学試験の祈祷の神様になった。そういうとんでもないことになってくるのです。我々が自分の欲望生活だけでものを考える。皆さんテレビを御覧になるでしょう。どんどん株が安くなった。私は株の値段が上がった、下がったといっても自分には直接的にはあまり関係がない事のように思いますが、資産家で株式をたくさん持っている方にとっては大変なことでしよう。含み損という言葉があります。資産価値が高い時の半分になる。自分の財産が四、五日のことです。含みに半分になってしまって、右往左往している。だんだんドルの値が下がって円の値段が上がって、今度は今、高い円で安いドルを買っておこうということの人々が行列している。そういうよ

うなことで我々は自分の欲望だけで動いている。こういう我々が構成している世の中を濁世という。「濁世の有情を哀れむ」とは、阿弥陀如来が本願を興されたのはこのような私たちをたすけねばならない。目覚めて生きる道を歩ませねばならないという、たすかる縁も手がかりもないものをたすけようという本願をおこされたのが阿弥陀如来の四十八願なのです。こういうことを法然上人と親鸞聖人が顕かにしてくださったのです。無縁大悲という。無縁とは縁なき衆生は度し難しという意味ではなく、たすかる縁もたすかる手がかりもない者をたすけたいというのを無縁の大悲という。無縁の大悲とは一言で云えば南無阿弥陀仏ということです。南無阿弥陀仏という言葉になつて全ての人に称えさせたい。そして南無阿弥陀仏という言葉によって聖道門仏教の修行の出来ない人も聖道門仏教の修行者と同質以上の他力の信心を得ることができると違つて我々は若い時から一生懸命修行しているのはっきりしないのに念仏称えたくらいでなんだという。そんなことができるかというような批判が聖道門仏教の中から出てくるわけです。それを一番はつきりいわれたのが日蓮上人です。「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」といつて念仏の非難を最初にあげています。念仏を称えたら無間地獄に墮ちると。何時までも出られない一番ひどい苦しい世界に墮ちるのだと念仏を批判されたのが日蓮上人です。日蓮上人はなかなか元氣な方で、日蓮上人の系統の日蓮宗を始めとしたいろいろな宗教がありますが、それらは今でも、真宗を仮想敵国としています。私は青年時代相当創価学会の人が私のところに来て「真宗

なんかやめておけ」といってなかなか喧しいことを云ってきた人がいました。私は笑っていました。あなた方は誰かに教えられて寺をやっつけるようにいってこられたでしょうが、私は真宗の教えが真実の教えだということを師匠から教えていただいてそれをずっと学ばせていただいております。あなたは日蓮上人に縁がある。お互いに仏教徒だからもつと折伏とか云わずに、静かに話をしたら共通点が見出されるのではないでしょうか。今日はこのくらいでまた来てくださいますか。云いましたら、それ以上は云わなかつたですね。やっぱりあれはマニュアルがあるのですね。相手がこういうことを云ったらこう云うと。こう云ったらこう云えと指示してあるものがあるのでしよう。私の云ったことはマニュアルには書いてなかつたのもう二度と来なかつたです。それは別として濁世の有情をあわれみてあなた方のどこが間違っているかをはつきりと教えるのが真実の教えです。たとえば靈信仰の間違いをただす。

靈といつてもいろいろあります。長いこと話していると時間がなくなります。靈といつたら、人間が死んだら身体がなくなつても靈はどこかにあるのだという中国思想があります。魂魄といつて「こん」とは魂で天に上がり、「ぱく」とは墓の下にある。魂魄が残っているから先祖の魂を大事にしないと祟りがくるのだとこういう思想です。靈魂不滅というのは洋の東西を問わずにあるのですが、浄土真宗においては魂魄がどこかにあつて我々に祟りがくるというような教えではありません。それは邪偽の教えです。亡くなった人は南無阿弥陀仏になるわけです。我々

が南無阿弥陀仏と申すと亡くなった人はよく念仏者になってくれたと喜んでくれるのです。霊が崇りするというようなことは全くない。爪の先ほどもない。ところが一般的には何かと云うと、霊の崇りだと云う。こういう一般の間違ったものの考え方を正してくださるのが浄土真宗です。邪偽を導くということですが、それは人のことを邪とか偽というのではなく、自分の内面にも邪偽があるわけです。邪偽は自分でなくそうと思ってもなくせない。なくせない邪偽というものが南無阿弥陀仏の用（はたら）きで転（ひるがえ）るということ、これが浄土真宗の大事なところで、転悪成徳。今の季節で申しますとつるし柿を生産する時です。渋柿の皮を剥いて吊るして作るのは御承知でしょう。あれは人工的に渋を抜いて甘みを入れるのではない。吊るしている間に渋が甘味になるのです。

そういうことです。転とはひるがえる。渋が甘味になる。それは一つの平易な譬えです。我々の中にある邪偽が南無阿弥陀仏の用（はたら）きでひるがえる。渋が甘味になる。迷いが悟りになる。そういう転悪成徳の世界を顕かにしてくださった方が親鸞聖人、法然上人だと私ははつきり申し上げたいわけです。『教行信証』総序の中に転悪成徳という言葉が出てきます。

一四九頁の七行目です。

「かるがゆえに知りぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑

いを除き証を獲しむる真理なりと。」

「円融至徳の嘉号」とは徳の満ちていること。「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。」と書いています。法然上人の教えによって本願の御法を聴かせていただくということがはつきりするのだと云っておられるのです。

「円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智」私の師匠である曾我量深先生は親鸞聖人は「成す」としているが、私は親鸞聖人に反対するわけではないが成すを「じょうずる」と読みたいと云われた。どこが違うかというと「成す」というと人はするように聞こえるが「じょうずる」とすると自然に成り立つと。本願力の自然によって悪が転じて徳と成る世界が明らかにされているのが真実の教えだと。それを会得させていただくことが信心獲得ということと。念仏を称えているが信心がはつきりしないという場合があります。私の母のことを一寸申しますが、私の母は昭和五七年に八三歳で亡くなりました。念仏者だったです。姑さんから一生懸命しこまれていつも念仏を称えておりました。昔は女の人は裁縫をしました。既製服がないわけですから皆裁縫をする。裁縫するには針と糸と針刺しがありました。今あるかないかは知りませんが。上のほうに針をさすところがあって下に糸を入れるところがある。針刺しの横に「衆生称念必得往生」という善導大師の言葉をはりつけてあったのです。どこで調べたのかどこで聞いたのか私は知りませ

んし尋ねませんでした。漢文で「衆生称念必得往生」と云う言葉を針刺しの横に貼ってあってしよっちゅう念仏していたのです。私の母が私の姉が生まれた時に産褥熱サンジヨクネツにかかりまして、記憶喪失になったのです。今ここにあったのがどこにやったのかわからない。老性のもではなく、若い時からそうなのです。私は今ちよつとそういうことがあります。老性の記憶喪失。今ペンを置いたのにそれを探している。母の場合は産褥熱サンジヨクネツの後遺症としての記憶喪失。そのため家でもいろいろなトラブルがありました。やっぱりさつきそこに置いたのではないかと私の父が申します。父は後遺症だということがわかっていたのですが、一緒に生活しているとそう云いたくなくなってくる。そうすると母は私のほうがいけなかったのだなあと、思い返して南無阿弥陀仏と称えていたのですが、称えることは称えるのですがはつきり信心が開けないのですからやっぱり生活が暗いのです。それでお念仏の後に一言ついていたのです。何がついていたかといいますと、「辛抱、辛抱」とついていたのです。私は母親に「そういうことを云う必要はないのですよ、私は教えを聞かせていただいたら南無阿弥陀仏の御徳で辛抱しなくてもいい世界がいただけるのが如来の回向ということですよ。だから辛抱、辛抱という必要はありませんよ、お母さん。」といったら「そうやなあ、おまえのいうとおりやなあ。」そのときはそういうのです。またしばらくすると、「南無阿弥陀仏、辛抱、辛抱」という。そういう問題です。

私が暗いといったのはそこなのです。お念仏を申しても「辛抱、辛抱」と云わなくてはなら

ないと云うことは、なにか私の中に暗いものがあるからそれを忍耐して外に出してはいけないのだという自分を抑える心が働いておるわけです。真宗から云ったら自力の用（はたら）きです。私はいつも母に申しました。「自力の計らひは必要ありません。念仏申したら、自分の愚かなことが知らされありがとうございますと云って、喜べるようになるのが信心歓喜ということですよ。」と申しますと「そうだな。」そのときは「良く云ってくれた。」と、一寸喜んだのですがしばらくすると「辛抱、辛抱」。それで、私は教えられました。これはなかなか人間の迷いというもの深いものだ。つまり、苦悩を完全に乗り越えるというか、乗り越えると云う言葉自体がいけないので、ひるがえるというのが一番いいでしょう。ひるがえる世界がなかなか会得できないのです。その会得できないひるがえりがお念仏の力で出来るようになるという事が転悪成徳ということなのです。今日はこれだけお話ししたらこれでいいです。本当ですよ。六か条書いてきました。浄土真宗は転悪成徳が完全に成り立つ仏教です。はっきりそういえると思います。

〈休憩〉

二番目の話を申し上げるところで休憩を挟みました。二番目の問題は

(二) 選択本願すなわち第十八願

その前次の資料を見ていただきます。

◆ 眞実教は方便教（主として聖道門および〈その他の哲学思想〉を含む）に対し、また一般世俗の邪義（名利愛欲追求・現世祈祷）に対す。

先ほど靈信仰と申しましたけれど、これは現世祈祷と繋がるわけでございます。それで一番目は終わりました、「選択本願すなわち第十八願」これは浄土眞宗という教えの意味です。これは『末灯鈔』と申しまして親鸞聖人のお手紙を後の人が編集をしたものであります。

「浄土宗のなかに、眞あり仮あり。眞というは、選択本願なり。仮というは、定散二善なり。選択本願は浄土眞宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土眞宗は大乗のなかの至極なり。」『末灯鈔』

（『聖典』六〇一頁）

難しい言葉ですね。六〇一頁の九行目を見てください。『末灯鈔』という題は後からつけたものです。末法の時代の灯となるお手紙を集めたものと言うような意味でしょう。長い題がついております。『本願寺親鸞大師御己証并辺州所々御消息等類聚鈔』これが本当の名前です。これでは簡単にいえないから『末灯鈔』と云われているわけです。『末灯鈔』の六〇一頁の九行目です。もう終わりのほうです。

「浄土宗のなかに、真あり仮あり。真というのは、選択本願なり。仮というのは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。方便仮門のなかにまた大小権実の教あり。釈迦如来の、御善知識者、一百一十人なり。」

このように難しい言葉が続いているわけです。親鸞聖人の弟子もいろいろあって関東には信房とか真仏房、顕智房とかいうような大変な立派なお弟子さんがいらっしやったわけです。その方々に対するお手紙でないかと思えます。一般のあまり聞法が徹底してない人にはこれだけ書かれてもちよつとよくわからないですね。よくわかる人にこういう難しい言葉でご返事を書かれたのでしょうか。これをいただいてみますと、浄土真宗は選択本願だといえます。

「せんじゃく」と仏の大智による「せんたく」です。先ほども申し上げましたように法然上人は九条兼実、当時の摂政関白太政大臣という高い位に就いていた禅定博陸といわれる九条兼実が法然上人の教えを非常に尊びどうか私たちのために教えを書き残してくださいというお願いをして『選択本願念仏集』という書物をお書きになった。それでこの選択という意味は浄土真宗の教団ではいま「せんじゃく」と読みます。どういうわけか浄土宗では「せんちゃく」と読みます。濁らないです。どういうわけか読み方の違いが出てきたかはわかりません。「せんじゃく」といっても「せんちゃく」といっても意味は仏の智慧でもって素晴らしいものを選び取り素晴らしいものを選び捨てるという意味です。人間の選択ではありません。人間は自分の好きなものを選ぶ、素晴らしいか素晴らしいか、全ての人に適応するかどうかそんなことはさておいて、自分の好きなものを買うのが人間の選択です。私など安くて美味しいものをスーパーで買う。それは貧乏人の選択。^{センタク}選択というのはいまの智慧で全ての人^{センジャク}がたすかるすばらしいものを選び取る。救われない人、漏れる人が沢山いるような菩薩の誓願は選び捨てる。誰一人として漏らさないというのはいまの言葉で云えば「あしきり」がない。入学試験などで「あしきり」と云うでしょう。私も孫が入学試験を受ける頃になつていたのでそういうことを思うのです。「あしきり」があるとかないとか云いますが、選択本願と云うのはあしきりのない本願です。誰一人としてだめだと云うことはないのです。

『歎異抄』の一条に

「老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし」

老少善悪とは年寄りであろうが若いものであろうが善人であろうが悪人であろうがとしか書いてないが全ての差別を超えてということ。性別も貧富の差も入っていますし、学問のあるないも入っていますし皆入っています。そういう差別が全くない。「老少善悪のひとをえらばれず。」えらぶとは選挙の選ではないです。簡単な「簡」です。

『歎異抄』はカナで書いてあります。老少善悪のひとをえらばれず。この選択の選ではないのです。こちらの簡です。意味は分け隔てをしない。

選ばれるとはこういう意味です。それで我々は、四十八願は絶対無差別の本願だということ。親鸞聖人と法然上人が顕かにしてくださって、その教えにご縁があつて私たちは念仏者にならしていただいたのです。南無阿弥陀仏は誰でも称えられるのです。子どもでも称えられるし、言語能力を失った人でも南無阿弥陀仏と称えようという心があれば口に出している言葉は「ああ」となっているかもしれないが本人は南無阿弥陀仏と称えている。私たちがやがてはそうなることもあるのです。介護の必要な人の中にも言葉が出ない人もある。手で持つ

て手話をする。そういう人でも念仏は称えられるのです。人には聞こえないかもしれないけれど心の中では南無阿弥陀仏と称える。人に聞こえなくてもいいのです。自分に響けばいいのです。南無阿弥陀仏とは簡単にいえば「仏に帰命せよ」ということです。この仏に帰命した人は全てたすかりますよという。仏様は私にそう云っていますよ。音が聞こえているか聞こえていないかは問題でない。聞こえるということは耳で音が聞こえるということとは違います。腹に響いてくるということです。

「しかるに『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。」（『教行信証』 信巻二四〇頁）

「信巻」にあります。聞というのは音が聞こえるとは違います。本願に疑いが晴れると云うことが聞です。疑心あることなし。そういう世界が大事なのです。そのこと一つがはっきりすればその他の個人的条件、社会的条件は問題でないと云うのが浄土真宗なのです。職業は何をしてもよろしい。法然上人は四国に流される時に、遊女の人「私たちはこういう人からさげすまれるような職業をしておりますがそれでもたすかるでしょうか」とお尋ねをした。そうしたら「やめられるものならやめなさい。やめられないのならお念仏をして続

けなさい。」と。そういうことです。この世の中では絶対いけない、こんなつまらない職業はないといっても、その人の業の果としてそうせざるを得ないということが出てくる。やめられるものならやめなさい。やめられないのならお念仏をしてその職業をやりなさい。そういう広い世界です。職業選択の自由ということがありますでしょう。しかしそんなに自由に選んできません。職業は。第一年齢に制限があります。もう私は自分が歳だからそう思います。定年退職をした人が再就職をするのは難しい。条件が悪い職業を選ばなくてはならない。私は空港で待ち合わせをしているとき見るのですが、空港のフロアーを掃除している人は殆ど高齢者です。大変だと思うのです。モップを持って掃除する。高齢者にはそういう仕事しかない場合が多い。今日これまで不景気な状態になればそういう状態が強くなってくると思います。職業選択の自由は憲法の上に規定してあるが、本当の意味で自由はないです。だからその人の置かれているところでどうしてもいやだけれど、この職業を選ばなければならぬ、しなければならぬということもあるわけですから、そういう場合でもちゃんと南無阿弥陀仏と申してその自分ではいやだと思いつつもちゃんとその職業で生計をたてていくことが出来るそういう世界です。そういう世界をはつきりさせていたください。そういう世界をちゃんと会得させていただけける道をはつきりしていただいたのが選択本願の回向ということですから。全ての人がかたすかるすばらしい本願を選び取ってあしきりのあるような菩薩の願を選び捨て

た、四十八願を選択本願という。ところが法然上人の場合は選択本願というと十八願だけのことです。どういうものか法然上人は十七願のことはあまり云われないのです。これはどういふわけか私はわかりません。『選択本願念仏集』とかあるいは弟子が聞き書きした大経釈など読みましたけれども第十七願のことはあんまり書いてないのです。ところが親鸞聖人は「行巻」を開かれて第十七願、諸仏称名の願というものを大事にしております。法然上人は第十八願を選択本願と云われるが、親鸞聖人は十七、十八という二つを立てて行を表す場合は十七願、信を表す場合は十八願と二つにわけ機と法に分けて教えられます。それは親鸞聖人と法然上人の違いだと思います。ですが選択本願と云うことには間違いがないです。仏の智慧で選ばれるのですから、人間の自分が好きなものを選びとるというのは違います。全ての人が救われる本願が選び取られたということを選択本願と云う。『選択本願念仏集』という本の題は略して『選択集』とはそういう意味です。法然上人が生涯かけて殺されても念仏は止められませんという信心の上から書かれたものです。ですから命がかかっておりますと云えます。我々は結論だけ聞きましたでああそういうものなのですかと止まっておつては親鸞聖人や法然上人の得られたお喜びが得られないのです。追体験できない。これは師匠に遇って教えを聞いて信心がはつきりすることが大事です。本を読んでわかる人もあるでしょう。ところが本を読んだだけで我々下根のものにはわからないのです。生きた師匠に遇ってこういう姿でた

すかつていくのだなということが頷けるところまで聴かないと信心がはっきりしないのです。というのは我々身体の間で煩惱が絶え間ないのです。何かの縁があれば煩惱が出てくるのです。私の師匠である曾我量深先生が九州のあるお寺に出て、丁度今の時分です。柿を出して、その坊守さんが「今年は柿に虫が付きましたまともな柿がありませんけれど」といって曾我先生に差し上げたそうです。そうしたら、曾我先生が「柿は本当は虫が食べるものでしょうが、それを人間が横取りしているのです。」と云われた。それはちょっと云えないことです。そういう世界です。師匠が一切衆性という観点から云われるのです。そういう世界が身についている人を善知識というのです。そういう世界が身についていないと「ああこんな虫のついた柿などたべられるか」と渋い顔をしなくてはならない。そういうことが世の中にはいっぱいあります。広いとか深いとかという抽象的なことは云いますけれども具体的になんかの時に広い世界や深い世界がでてくる。具体的な生活の中で言葉になって行動になってでてくる。そういう先生が真の先生だと私は云います。そういう生活を見て自分の信心は足りないなあ、不徹底だなということをわからせてもらって一生求道しなくてはならないという思いが起きるわけです。師匠に会わないと俺はもうわかったと云うつもりになるわけです。人間は頭を上げるほうが簡単なのです。頭が下がらないのです。わたしは一昨日初めて荒川区のお寺にいったのです。自動車で連れて行ってもらったのですが凄く雨がひどかったので

す。着く十分ほど前は凄い雨でした。ワイパーを早く動かしても前が曇って見えないような降りでした。その時私が横を見たらトランペットフラワーという下を向いて咲く花がとても綺麗でした。普通の花は上を向いて咲いていますので雨が降ると花びらが飛びますが、トランペットフラワーは雨が降ってもすーと流れて花は知らん顔です。私はそれを見てこれだなあと感じました。こうして咲くのは簡単のようだけれども難しい。頭上げると悪条件がくるとクシャとなる。ところが頭が下がっていると、条件がいくら悪くなってもさらっとそれが流れる。そういう世界です。雨降りに車に乗せてもらってトランペットフラワーの姿を見てそれを感じた。そうだなあと。機の深信とはこういうことだなあと。頭を上げることばかり考えている私がわからせてもらおう。頭が下がらない私だと知らしていただくということが機の深信だと思わせていただきました。それは自然法爾ということがあります。親鸞聖人が自然法爾とは植物であろうが動物であろうが逆らわずにやっていることが実は南無阿弥陀仏の深い意味を表しておるのだと。そういうことが見えるようになることがありがたいことだと思います。我々そういう世界がわからないと金儲けばかり考えます。何とかして少しでも金儲けしよう。欲望社会ですから。それがいろいろな問題を今おこしていますでしょう。円高になって一ドルが九十円くらいで皆が円とドルとを換えようとする行列して交換するということ。がテレビででききました。金もうけだけをしょっちゅう考えておればそういうことになるの

でしょう。それが欲望社会です。仏教の言葉で言えば貧欲の迷いの世界の中でどうしたら我々が真実の法にあつてたすかつていくかという問題です。これが選択本願の大きな問題です。

「智慧光のちからより

本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつつ

選択本願のべたまう」

『高僧和讃』

これは親鸞聖人の御和讃です。この浄土真宗をひらいて選択本願を我が日本の国に広められた。もし法然上人が日本で浄土宗を独立されることがなかったら、我々は真実の教えに遇うことはなかった。お蔭様で私は深いご縁をもって法然上人にお会いして選択本願の深い意味を聴かせていただくことができましたと喜んでおられます。親鸞聖人は一宗を開くなどという野心は全くない。寺も持たれなかった。一宗を開き宗祖などになろうというような野心は全くなかった。一生涯法然上人の弟子として、親鸞聖人は「弟子一人ももたず」と云われ、法然上人の弟子の立場をとりつづけた方です。私を師匠として慕ってくる人がありましてそれはわたくしの弟子ではありません。これは私の友達であります。御同朋御同行。全て法然上人の弟子であります。ということ云っているのが、『歎異抄』の「親鸞は弟子一人ももたず」ということです。なかなかそういう心境にはなれないです。ちよつと勉強すると師匠

になってしまうのです。人に教える立場になる。いただく立場になれない。そういう問題を我々は持つておりますのでそういうところを原点に返って法然上人と親鸞聖人の教えを深くいただかせてもらおう。そういうところに報恩の深い意味があると私は思っております。時間が過ぎましたので一番と二番しかお話ができませんでした。また、いつか機会がありましたら残りのお話をさせていたいただきたいと思えます。報恩講だけでなく毎月例会に私はここにお邪魔しております。来月も参ります。どうかご縁がありましたらお参りいただくようお願いをいたしましてこれで終わらせていただきます。

〈座談〉

(住職) 質問をお受けしていただきたいと思います。

(先生) どうぞ

(司会) 櫟先生のお話が終了いたしました。ここで質問等ございましたら、お願いしたいと思います。今日のお話の中からも結構でございますし、日ごろ色々とお気づきの点がございましたことでも結構でございますので、一つどなたかお出ででしたら、お手をお挙げていただき質問をお願いしたいと思います。

(淡海) どうもありがとうございます。お久しぶりです。長いこと失礼をしておりました。今日、法然上人と親鸞聖人の出遇いというものが本当に縁があつて遇えたということの有難さと、そこで親鸞聖人が一宗をたてるのではなくてという、その気持ちが伝わりありがたく思っております。私が今日お聞きしたいのは『教行信証』のはじめのところ、そして終わりのところにも『竊かに以みれば』という言葉が始まっていますが、そのところのその言葉がすぐく耳にかかりまして、とても味わいがあるというのか、感じていますので先生のそのへんのお話を伺えればありがたいと思ひまして。

(先生) そうですね。今日はそこまでお話をすることができませんでした。「竊かに以みれば、

難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。」という始めに「竊かに」と云う難しい字が書いてあります。あれは今の略字で書きますと「窃」「ぬすむ」と言う字になります。ここのがどういう意味になるかを考えてみましたら、善導大師、中国の善導大師のお言葉に「竊かに以みれば、真如広大なり」と云う言葉があります。真如とは真実の道理そのもの、形がない真実の道理は我々普通の人間がいくら思おうとしても思うことの出来ない、つまり人間の論理的説明を出来ないようなものが真如と云うことです。真実の道理と云うことです。そういう言葉があります。「竊かに以みれば真宗遇いがたし」と云う言葉が善導大師の言葉にあります。これも真宗というのは真の仏教ということです。真の仏教には遇えない。それは先ほどから申しましたように全ての人があしきりなく救われる仏教を深く信ずるというのは容易ではない。つまり本願の仏教です。本願の仏教に遇うということは容易ならないということを善導大師はいつておられる。最初は真如広大なりと真実の道理は広く深くって人間の論理的追求を超えているという意味で「竊かに以みれば」というわけです。二番目の「竊かに以みれば真宗遇いがたし」と云うのは差別のない仏教に自分のこととして遇うことが容易ならないということを云っている。その二つを親鸞聖人は読まれて非常に感激されたのでしょうね。それで「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明

は無明の闇を破する恵日なり。」という『教行信証』の最初の言葉です。それで、そういう言葉を用いているのはのちの人はそれは卑見の辞だと、卑見とは謙遜という、卑見の言葉だという解釈をしておるのです。それは存覚上人の『教行信証』の注釈書である『六要抄』にもそう書いてあります。私はそうは思いません。これは何も謙遜されたわけではないのです。人間の頭ではとても及ばないようなことを竊かに思わせていただくときにという意味で「竊かに以みれば」と云う言葉がでてるのだとこういうふうに思っています、そういうことで「窃」「ぬすむ」と云う訓がありますように通じてきます。「窃」「ぬすむ」とはなにも物を窃盗するという意味ではありません。自分の分限以上のことをいまま考えますのに、考えさせていただくのという意味が「竊かに以みれば」ということにあらわれておると私は了解しております。

(淡海)

ありがとうございます。今日ご住職がここでお読みになられた時も『教行信証』のことが出ておりましたので、この言葉が耳に残りました。そして、「化身土」の最後にもこの言葉がでていまして、最初と最後にありますのでこのことをお聞きしたかったのです。

(先生)

もう一つもうしますと、『教行信証』全体が人間の頭ではとても類推することの出来ない深く不可思議なる本願の大道を私が了解させていただいたことを書くのだというお心

(淡海)

が両方に「竊かに以みれば」とでておるのだと、こういういただき方が出来ると思います。どうもありがとうございます。

(住職)

「竊かに」についてあわせておたずねしたいと思います。窃盗の窃も古い字のなかにも、どろぼうが盗み見るような意味がありますね。覗き見るような。私も「竊かに」を辞書で引いてみますと盗み見るような意味をもっているのが驚いたのですが、『選択集』には書いてないでしょうが、唯円は『歎異抄』で書いているのですね。「竊かに」と。すると「竊かに」と云う字はまことに存覚上人がいうように卑見の義があるのではないのでしょうか。自分が泥棒のように真実真如をのぞき見るような人知で分別してわかったようなことを書かなくてはならないことは真に恐れ多いことだということが無きにしも非ずではないかと思うのですが。学者がいうのですね。管見というのですね。竹冠に官僚の官を書いて管見すると。私は本当に謙虚な卑見の義とは学者だって本当は大きな真実があるのにわずか竹の穴で世界を見るようなとって卑見の義は管見だと私は思いません。管見すると等しいのが「竊かにみる」という覗き見てという真実真如をそっと覗き見るといふそういう卑見の義があると思うし本当に謙遜しているという小さなものが見るものを覗き見るような卑見の義があるような、存覚上人の『六要抄』も認めてやっ

てください。という意見はどうでしょうか。

(先生) 私はあんまりそれには諸手を挙げて『六要抄』には賛成できないつもりでおります。

(住職) 『六要抄』に対する批判もあるし、『六要抄』が『教行信証』を読み取ってきたテキストにもなります。

(先生) 私がお答え申したようなことが私が長い間この「竊かに以みれば」について考えさせていただいた結論であることを申し上げておきます。

(司会) 他にございませんでしょうか。

(田中) 先生 お久しぶりです。

(先生) 一年ぶりですね。

(田中) 申しわけございません。久しぶりに先生のお話を聞かせていただきましてありがとうございます。さいました。人間生きていくうちには落ち込んで鬱になってそういう病気になるわけですが、そういう時に今まで教えを聞かせていただいたものが崩れ去るといふか何のためには自分は聞いていたのかという、そういうことに落ち込むのですよね。やっぱりそこが自分の弱さなのかなあと思つて、自分を責めたりするのですが。病気になったりするのはいたしかたないのですが、そこをどういふふうに乗れ越えていくかということですが。今日の先生のお話を聞かせていただいて、聞き方が足りない、本当の信心がわかっていないということなのですが。そういう点でどういふふうに乗れ越えてよいか、お聞きし

たいのです。

(先生)

我々全て煩惱具足の凡夫でございまして、凡夫ということは中国語では普通の人間という意味ですが、中国語に訳される前の印度語では「異生」と云う意味です。異なる生と書いて。人間の一生の中でいろいろな妄念妄想を起こして罪をつくっておる。だから地獄、餓鬼、畜生の三悪道を始めとして迷いの生を受けなくてはならないということが凡夫の元の言葉です。元の言葉を直訳すると異生という。これではわかりにくいので凡夫と云う。聴聞をさせていただいても凡夫の生がいよいよ知らされてくる。聴聞させていただくことでいよいよ凡夫の生が知らされてくるということがあなたのおっしゃる病気です。私は目だつて大病ということがありませんけれど、年とともにどれくらい生きるのだらうかと人間百歳まで生きるといつても後十五年しかないと思うとなんか寂しい感じがするのです。本当に命終わる時にありがとうございました、お蔭様で人間に生まれて尊い教えに遇わせていただきまして何もいうことはありませんという心で死ぬるかという問うことがあります。それも計らいであります。親鸞聖人の教えでは平生業成ということが大事であります。臨終がどういふことになりましたもそんなことは問題でないというのが親鸞聖人の教えでありますから、あなたが病氣した時にいろいろな妄念妄想が起こつてもそれは自分の煩惱のなせる業であることがはっきりとわかる鏡、言葉が南無阿

弥陀仏であります。私はそういう具合に了解しております。生老病死の四苦は誰一人として免れる者はございません。病氣もいろいろありまして肉体の病氣、聖道門の坊さんが四大不調と申します。四つの身体の構成分子というものの調和が乱れたということが病氣であつて四大不調と申します。浄土真宗ではそういうことを申しませんがとにかく病氣にも身体の病氣と精神の病氣があります。精神の病氣もいろいろあります。鬱になつてくるあるいは躁になつてくる両極端とか理性的な判断がとれないで条件次第で思いが違つてくるといふ病氣があります。精神分裂症というと昔の人がいえば差別用語で気がいといふことに結びつくのですが、精神分裂症も強度の場合はそうでしょうが、軽度の場合の精神分裂症は皆かかっているのではないでしょう。条件次第で精神が分裂して健康な時はたすかつたような気がするし、病氣の時はたすからんような気がするし、金ある時にはたすかつたような気がするし、金が足らん時はこんなことで損ばかりしてどうにもならんといふ気持ちになる。条件次第で精神は分裂する。定散二善というは聖道門が修行する上において精神を統一する修行方法はあるけれどももしかしながら人間は自分の力で、凡夫は自分の力で完全に精神を統一することは出来ない。という自分の分限分際をよく知つて我々は本願を信じ念仏申す生活を続行させていただくのが浄土真宗です。以上です。

(住職)

先生と田中先生との問答の中の分裂というのは、今は統合失調というそうです。

皆失調状態になっているのでしよう。皆統合されれば何の迷いもなくていいのですが迷っているというのは統合されていないからでしよう。そんなことをいうと広い意味で皆罹っているという誤解なく私は配慮していつています。一つ余計な話を申し上げますと、私面白い話を知ったのですが、アインシュタインは分裂症的学者、ダーウインは躁鬱的学者で学者の世界でも分裂症的学者と躁鬱的学者が双壁になるそうです。どっちが優秀かという分裂症的学者が優秀だと、その代表がアインシュタインだと。学者はどちらかに分けられるそうです。やっぱり一つの研究をしていけばわからなくなるか、ひらめいてわかったというようになるか、けど説明してもわからないとか、そういうところに行くでしよう。一喜一憂していくのでしようけれど、ものを創造するとか新しいことに挑戦していく象牙の塔、学者の世界も二極に対立して、どっちが優秀かという分裂症のほうが優秀だと。なかなか人間はどこまでも分類していくものだと思います。何の心配がないのが南無阿弥陀仏だと櫟先生がおっしゃったのだと思うのですが。皆この世界では病名をつけますから、レッテルを貼られたらたまらないよ。レッテル貼られて喜ぶ場合もあるがレッテル貼られたら、ふざけるなということもあるから、医者が絶対でもないし病名をつけたから絶対でもないよね。田中先生はすぐわかるよね。医学を

絶対にしたら人間はたすからない。そこに念仏という世界があるということと共にたずねていきたいです。余計なこと云いました。

(司会)

他にございませんか。それでは櫟先生のご法話をこれで終了させていただきます。櫟先生ありがとうございました。

あとがき

本書は平成二十年十月二十六日、第十八回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

報恩講を迎えると、一年というのはあっという間に過ぎ去り、深まりの無い一年を過ごしてしまつたと痛感します。しかし、逆を云うと一年間を振り返る機会を与えられているので、立脚地を確かめさせて頂くまたとない場ではないかと思つていきます。

時は国民の圧倒的支持と期待により、自民党政権から民主党政権（連立省略）へと変わった。ある民主党議員が与党というのは、「国民の不安というものをどれだけ少なくできるかが大事だ」と発言していた。完全に不安というものは無くすることができないとしても、どうということが国民全体にとつて納得できるものなのか。立場によつて不公平感が生じれば納得いかないというものを常に抱えているがゆえに大変難しい問題です。

仏法を聞いても経済的に裕福になるとか、生活に困らなくなるということは決してありません。しかしながら何故教えを聞くのか。本書で先生は、「南無阿弥陀仏とは簡単にいえば「仏に帰命せよ」ということです。この仏に帰命した人は全てたすかりますよという。仏様は私にそう云っていますよ。音が聞こえているか聞こえていないかは問題でない。聞こえるということとは耳

で聞こえるということとは違います。腹に響いてくるということですよ。」とお話されています。念仏を申せば救われるというのは念仏の発音にとらわれてしまいがちですが、そうではなくて、「たすかりたい」と発したものに、「たすけるぞ」ということが腹に響いて頷かれるということが南無阿弥陀仏の救いだと感じさせて頂いております。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご多忙の中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様には、お役を快くお引き受け下さり感謝申し上げます。合掌

平成二十一年十月二十五日

第十九回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎